

荒砥荒子遺跡の方形区画遺構

鹿田 雄三・相京建史・中沢 悟
菊池 実・小島敦子・斎藤利昭

1. はじめに

当遺跡は前橋市街地より東方約10km、前橋市荒子町地内に所在する。県営ほ場整備事業荒砥北部地区工事に伴う事前調査として、1983年2月に群馬県教育委員会文化財保護課西田健彦により試掘調査が行われ、本調査を同年3月25日より5月10日まで実施した。本概要では方形区画の遺構を中心にして述べるが、それ以外に調査された遺構は鬼高期から国分期までの竪穴住居跡8軒、溝3条、土坑8基、井戸1基、および、浅間B輕石により埋没した谷である。また、調査終了に近づいた4月23日には現地説明会を実施し、地元、県内外の見学者多数を得た。説明会の

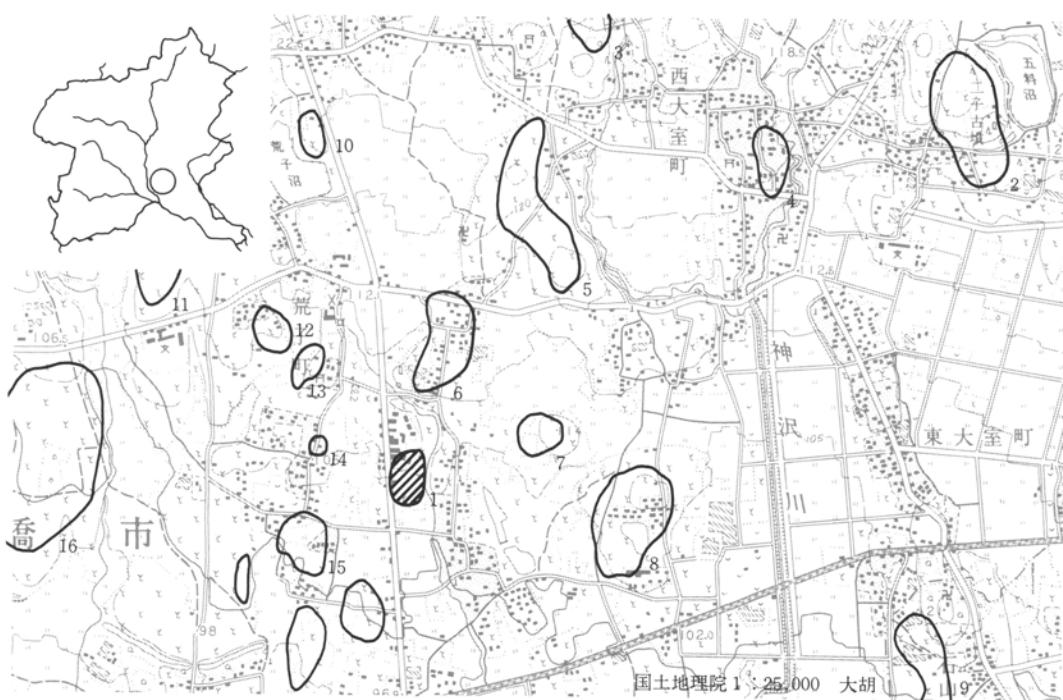


図1 遺跡の立地と周辺遺跡

- | | | | |
|------------|---------------|-----------------|-------------|
| 1. 荒砥荒子遺跡 | 2. 前、中、後二子山古墳 | 3. 伊勢山古墳群 | 4. 下諏訪古墳群 |
| 5. 阿久山古墳群 | 6. 舞台古墳群 | 7. 丸山古墳群 | 8. 天神山古墳群 |
| 10. 川籠皆戸遺跡 | 11. 頭無遺跡 | 12. 荒砥下押切遺跡 | 13. 荒砥中屋敷遺跡 |
| 14. 荒砥新屋遺跡 | 15. 荒砥上ノ坊遺跡群 | 16. 荒砥大日塚、鶴谷遺跡群 | |

後、方形区画の遺構の性格をめぐって検討会がもたれ、多くの研究者から意見が寄せられた。

なお、方形区画の遺構は、前橋土地改良事務所、地権者、群馬県教育委員会、当事業団の協議の結果、設計変更を実施し、切土を行わず埋めもどす工法をとることに決定した。

2. 荒砥荒子遺跡の立地と周辺の遺跡

赤城山南麓には、広大な裾野が広がっているが、標高500mで山地帯から丘陵性台地へと変化し、200mより下位の地域は低台地化している。また赤城山より流出する中小河川によって樹枝状の開析谷が形成され、低台地周辺より流出する小支流等により小規模で複雑化した沖積地帯が形成されている。当遺跡は、標高約100mで北からのびる幅約400mの低台地の東縁部に位置する。東側を小河川が流れ、これとの比高差は約3mである。西側は、この小河川の支流と思われる浅間B軽石を埋土に挟んだ埋没谷が方形区画の遺構の立地する低台地を削り取っている。

荒砥地区の低台地縁辺には、旧石器時代から中世にいたる遺跡が帶状に展開し遺跡群を形成している。開発の拡大による事前調査が年々増大し多くの問題を生じているが、調査の進むなかで、竪穴住居跡、墳墓等の調査だけではなく、浅間C軽石埋没畠、溝、溜井、浅間B軽石埋没水田、浅間B軽石上の畠、女堀等の生産遺構の調査事例が増えている。県下有数の遺跡地である荒砥地区は、隣接する赤堀地区とならんで大古墳群地帯としても著名である。1935(昭和10)年に行われた古墳の分布調査では65基と記録され、調査漏を入れると数百基の一大古墳密集地帯といえる。低台地の中の小丘部の多くには、前方後円墳や群集墳が築かれている。当遺跡から北東約2kmには、前二子・中二子・後二子山古墳と100m級の前方後円墳の集中する大室古墳群、西南西約2.5kmには今井神社古墳というように50mを越す前方後円墳が分布する。こうした遺跡群、古墳群の存在から、従来、荒砥地区は上毛野君一族の本拠地と推定されてきているが、その内容は必ずしも明らかでない。特異な性格をもつと考えられる荒砥荒子遺跡の性格づけ、位置づけは、先述した点をも踏まえ、荒砥地域の遺跡のあり方から解明していくことが今後の課題であろう。

3. 遺構の概要

荒砥荒子遺跡の特色として、方形に区画された堀と、堀の内側にあってほぼ堀と平行に作られた棚状遺構およびこれらの遺構とほぼ同時に存在したであろうと考えられる竪穴住居跡2軒、竪穴状遺構2軒があげられる。その他の検出された遺構としては、少し時期が新しくなると思われる竪穴住居跡6軒、方形区画外でこの遺構と同時期の可能性があるが明確でない竪穴住居跡2軒、時期不明の井戸・土坑・溝等がある。ここでは遺跡の特色である方形に区画された堀と棚、同時期の可能性の考えられている竪穴住居跡と竪穴状遺構についてその概要を記したい。

(1) 方形に区画された堀と棚

この遺構は発掘調査の結果、東北端から西端にかけて全体の約1/3近くが埋没谷により削られたものであることがほぼ明らかになった。そのために全体像を知ることはできないが、おそらく次

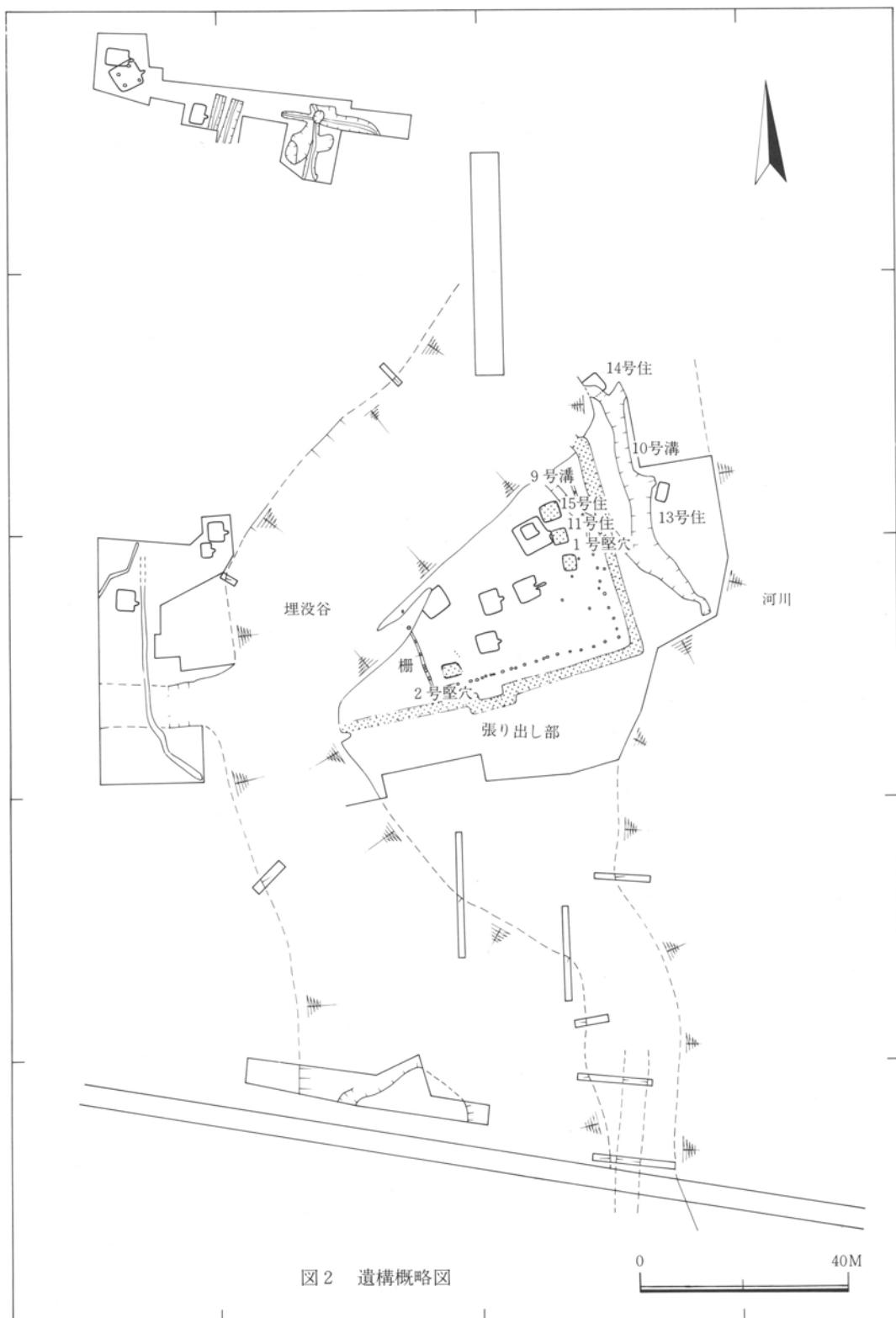


図2 遺構概略図

のような規模をもつものであろう。東西の長さは $59m + \alpha$ 、南北の長さは $43m + \alpha$ で東西方向に長い長方形を呈していたものと思われる。方位はN—20°—Wである。堀の幅は約2.5m、深さは40cm前後である。堀の形状は「L」状を呈している。遺構確認面は耕作面より30cm前後であり、遺構全体が少なからず削平されていた。特に南半分における削平がはげしい。方形に区画された堀の南辺ほぼ中央には、南へ2.5m・幅5mの規模を持つ長方形の張り出し部が存在する。堀の中からは100個体以上の和泉期相当の土器を中心とした遺物が出土しており、遺構の年代観を示している。それらの遺物は東側の堀、特に南東隅部分や南側堀の張り出し部周辺および張り出し部東側に多く出土し、他の部分での出土は少ない。

柵列は堀の内側約2mの地点で、堀に添って柱穴が平行に検出できた。南側の堀に沿う柵列は、柵東南の端から西へ約36mの地点までは平行に検出できた。西側南北に検出できた柵列は、南西隅から南側の柵列に対して西に5°ほどずれるがほぼ直角に北側へ向かって延びて埋没谷と接する部分で不明となる。柵は堀にそってほぼ平行に掘られている深さ20～30cm、幅30cmほどの溝とそのなかに径20～30cm、深さ20～70cmでほぼ等間隔に掘られている柱穴から成り立っている。この柱穴と柱穴を結ぶ溝は、柵の東側北半分と南側の西端、西側全面に認められた。他の部分は削平の可能性があり、柱穴のみ確認されただけである。柵を成す柱穴の間隔は2～2.5mでありほぼ一定している。南側中央部に張り出し部を持つ地点の柱間は約1mの間隔で確認できた。

(2) 方形に区画された堀および柵遺構と同時期と考えられる遺構

方形区画の内外において検出された遺構は、竪穴住居跡・土坑・溝・井戸等であった。それらのなかで、方形に区画された堀および柵遺構と同時期の可能性のある遺構としては、11・15号竪穴住居跡2軒、1・2号竪穴状遺構（住居跡の可能性が高いが、削平により住居跡と断定できなかったためこの名称で呼ぶ）2軒がある。竪穴住居跡としては他に8軒検出されている。13・14号竪穴住居跡は和泉期に相当するものであるが、立地や10号溝との関係から疑問が残り、1～4、12・16号竪穴住居跡は鬼高期中頃の土器を伴うことにより同時期とは考えにくい。同時期と考えられる竪穴住居跡、竪穴状遺構からの出土遺物は少なく時期決定には弱い点がある。しかし、出土土器の特色とこれらの遺構配置の在り方等からみて、ほぼ同時期に属する遺構と考えている。

方形に区画された堀・柵内より検出された和泉期の住居跡2軒と竪穴状遺構2軒の概要は以下の通りである。

〈11号竪穴住居跡〉

当竪穴住居跡は15号竪穴住居跡と1号竪穴状遺構のほぼ中間に位置し、西壁の中央部を鬼高期の12号竪穴住居跡により切られている。規模は長辺3.14m、短辺2.7mを測り、ほぼ方形に近い形状を呈している。主軸はN—20°—Wである。床面の状況は南壁に沿い約50cm幅で一段高い床面を持ち、他の床面との高低差は約8cmである。遺構確認面から下部床面までの深さは約25cmである。炉跡は床面中央やや北西に位置し、長径約50cm、短径約42cm、深さ約5cmであり、焼土が検出された。

<15号竪穴住居跡>

当竪穴住居跡は11号住居跡の北約2mに位置している。規模は長辺約3.7m、短辺約2.8mを測り、隅丸長方形を呈している。主軸はN-20°-Wである。壁溝は西辺と東辺の一部に幅約15cm、深さ2~7cmの規模で確認された。炉跡は中央やや北寄りで径約36cm、深さ2cmで円形を呈し、焼土が検出された。柱穴は床面の四隅と南壁下西寄りに5本が確認できた。遺物の出土状況は東壁下中央部に少数出土している。

<1号竪穴状遺構>

当竪穴状遺構は11号竪穴住居跡の南約2mに位置している。11・15号竪穴住居跡とともに方形区画東辺堀から約6m、柵から約4m内側に位置し、堀と柵に添ってほぼ平行にならんでいる。規模は長辺約3m、短辺約2.7mを測り、隅丸長方形を呈している。主軸はN-20°-Wである。炉跡は竪穴状遺構中央僅か南寄りで検出された。床面は荒れており、炉跡は三日月状を呈する残存であった。規模は長径65cm、短径35cm、深さ8cmであり、焼土が検出された。柱穴は床面東壁下中央部付近と東南隅で確認できた。

<2号竪穴状遺構>

当竪穴状遺構は方形区画内南辺の柵と西辺の柵の接する西南の隅の内側に位置している。後世の11号溝と耕作により多くが削平されていた。現状における規模は、長辺約3.5m、短辺約2.5mの東西に長い長方形を呈している。主軸はN-20°-Wである。壁溝は北辺の大部分と西辺の一部で確認でき、その規模は幅約15cm、深さ約5cmである。11号溝によって切られていって、東側床面部分に焼土が検出されたが炉跡とは考えにくい。

(3) 埋没谷と遺構東側の河川

方形区画の堀や柵に囲まれた遺構は、埋没谷により北東から南西に向かい大きく削られている。埋没谷は幅約30m、深さ約1.6mの大きなものであり、南流し蛇行している。埋没谷は幅広であるが浅く、緩傾斜である。埋没谷底面には小河川跡が検出された。この大きな埋没谷は天仁元年(1108)に浅間山より噴出したと考えられているB軽石により一気に埋没している。水田跡検出にも努めたがその可能性が考えられるものの明確にすることはできなかった。方形区画の堀や柵に囲まれた遺構の東側は、一段低くなり現在河川が南流している。その河川に向かい9・10号溝が検出された。9号溝は方形区画東辺の堀や柵を北西から南東方向へ横切っている。発掘調査の結果、堀と柵の遺構よりも古いことが確認された。また10号溝はその一部を9号溝と共有し、現在使用されている河川に流れ込んでいる。この10号溝からは和泉・鬼高郡の遺物が多数出土しており、また走向が方形区画の堀と一致すること等から考えて、この東側河川もまた古墳時代において存在していたものと思われる。

埋没谷は堀や柵に囲まれた遺構北側で大きく西へ曲がり、遺構南側で東へ曲がり、東側の河川に合流することなく西へ向かっている。そこにできた中洲に近い平坦地に方形区画の堀や柵の遺構が作られている。

4. 出土遺物

遺物は、方形区画の堀に集中して出土している。遺物のとりあげ点数は200を越える。区画内の堀に付随すると考えられる2軒の竪穴住居跡、2軒の竪穴状遺構からは良好な遺物の出土はみられなかった。ここでは、多くの出土遺物のなかから堀出土の土師器7点について紹介することにする。

特に遺物が密集して検出されたのは、南辺の堀の張り出し部から東南隅にかけてである。

1は、小型の塊形土器で、東南隅から堀底上8cmの位置で出土した。灰褐色～黒色を呈し、石英粒・細砂粒を胎土に含んでいる。底部外面はヘラケズリされ、体部は内外面ともよくなでられている。

2は、橢形土器で口縁部が欠損している。張り出し部南から、堀底より9.5cm浮いた状態で出土した。灰褐色で、胎土には雲母・石英・長石の細粒を含んでいる。肩部に焼成前の一穿孔がある。

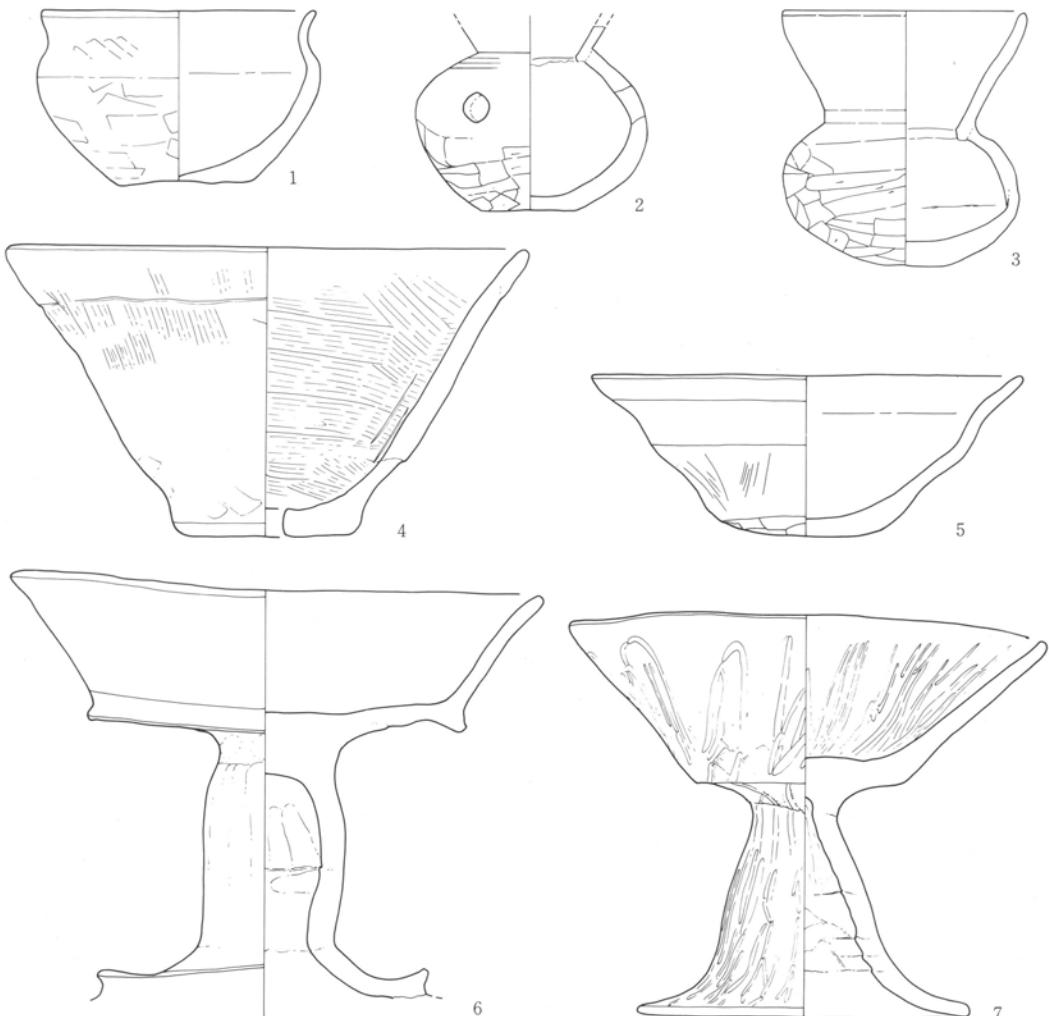


図3 出土遺物実測図 (縮尺=1/3)

3は、完形の乳白色の壺形土器で、砂粒と多量の雲母・石英の細粒を含んでいる。張り出し部の東側から堀底上5cmで横に倒れた状態で出土した。付近には、高杯形土器の破片や棒状の炭化物も出土している。

4は、ほぼ完形の壺形土器である。赤褐色を呈し、雲母・石英・長石の細粒を含む。南辺の隅で斜めに倒れた状態で、溝底上3cmで検出された。外面の調整は荒く、輪積痕が随所に残っている。内面は、外面に比してよくハケ状工具でなでられている。

5は、灰白色の鉢形土器で $\frac{1}{2}$ 欠損していた。胎土には、砂粒・石英・雲母を含んでいる。張り出し部の南側で堀底直上、正立して検出された。

6は、杯部・脚部端部に稜を調整した高杯形土器である。胎土には、砂粒・雲母・石英の細粒が多量に含まれ、器壁は、橙褐色を呈している。南東隅の北側で堀底上8cm、横に倒れた状態で出土した。器形にはやや歪みがある。脚部端部は欠損しているが、平らな円盤状のものがつくと思われる。

7は、赤褐色の高杯形土器で、内外面のヘラミガキが特徴的な土器である。胎土には細砂・石英・雲母を含む。南辺の堀の中央で溝底直上で出土した。ヘラミガキは乱雑な放射状で、杯部外面は波状を呈するまでに乱れている。

5. 成果と今後の課題

荒砥荒子遺跡は先述のように、1983年3月～5月に発掘調査が行われたが、未だ調査成果の詳細な整理作業は実施されていない。そのような段階で、あえてこの小文を草したのは、群馬県内で同類の遺構が最近あいついで発見され、全国的にも類例が増加するなかで、航空測量図や航空写真、発掘調査時の所見等、基本的な資料を紹介することが急務であると考えたからである。したがって、結論的なことを述べることはできないが、調査の成果と今後考えていくべき問題点を最後にいくつか掲げて、まとめとしたい。

時期については、4で紹介した遺物からして、いわゆる和泉期のものと考えたい。前述したように、すべての遺物を検討したわけではないので時間幅がある可能性もあるが、ほとんどの遺物がこの時期に比定できると考えている。一般に、鬼高式土器のメルクマールの1つと考えられているいわゆる須恵器模倣の杯形土器は、方形区画の堀および同時期と考えられる竪穴住居跡からは出土していない。群馬県内の和泉式土器については、今まで発掘された竪穴住居跡が少なく、整った編年は組み立てられていないので、絶対年代を特定することは困難である。最近、赤城南麓でこの時期の遺構の発掘例が増えており、それらを検討するなかで、荒砥荒子遺跡の方形区画遺構の時期の問題については考えていく必要があろう。

遺構群の構成についてみると、南側に張り出し部をもった方形区画の堀と、その内をさらに区画するように方形に並ぶ柵列と、その区画内東部に南北に並んだ2軒の竪穴住居跡と1軒の竪穴状遺構、西南隅の1軒の竪穴状遺構という配置が規格性をもったものと見えられる。各住居跡か

らの出土遺物は破片がほとんどで、その土器から堀と同時期であると断定はできないが、堅穴住居跡自体の構造や規格的な配置からみて、この2軒の堅穴住居跡と2軒の堅穴状遺構は、先述の柵列とともに、堀と同時に存在した遺構群であると考えている。このうち柵列は、東辺・南辺は堀のすぐ内側に並び、西辺は、堀によって区画された敷地内をさらに東西に区画するように位置している。外との区画とともに、敷地内の空間構成にも関わっている。また、張り出し部の北側の柵列の柱穴間隔が狭くなってしまっており、何らかの施設が考えられる。これを門と考え、張り出し部は出入口だとも考えられようが、この遺構群の正面はどこかという問題とも関連して、早急な結論は避けたい。北西部が埋没谷で削りとられているために、全体の構成が、今ひとつはっきりしないのは残念である。

さて、この遺構群の性格についてであるが、ひとつの空間を区切った建物の跡であることはまちがいなかろうが、それが即豪族の居館跡であるというのは早計であろう。最近発見されたこの種の遺構と可能な範囲で比較してみても、回りに方形区画の堀をもつということだけ共通で、遺構群の規模や、区画内の空間構成、出土遺物の特殊性など、バラエティに富み、類型化することもむずかしい。荒砥荒子遺跡では、堀立柱建物や祭祀遺物は検出されず、区画の規模も小さい。本稿では、遺構の性格については結論を保留しておかざるを得ない。類例の増加を待ちつつ、区画の意味づけや区画内の空間構成等の比較を通してどういう性格の遺構であるかを明らかにしていきたい。また、荒砥荒子遺跡だけではなく、周辺に分布している集落遺跡や埋没田畠、古墳群などとの関係を検討する視点も必要であろう。

なお最後になりましたが、遺物の実測については、岩崎泰一氏、霜田恵子さん、関口加津枝さんの協力を得ました。記して感謝いたします。

註

- (1)これまでに荒砥荒子遺跡は、現地説明会資料『荒砥荒子遺跡』1983（財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団、「年報II」1983同、「考古学ジャーナルNo.221」1983、「季刊考古学第5号」1983、にその概要が紹介されている。)
- (2)火山灰の名称は、新井房夫「関東地方西部の縄文時代以降の示標テフラ層」『考古学ジャーナルNo.157』1979に掲った。
- (3)同様の遺構関係文献
 - 〈三ツ寺I遺跡〉
下城正・女屋和志雄・小安和順・新井順二「群馬県三ツ寺I遺跡調査概要」『考古学雑誌』第67巻第4号 1982年3月
下城正「三ツ寺I遺跡」『年報I』（財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団）1982年3月
〃「三ツ寺I遺跡について」『群馬歴史散歩』第52号 1982年5月
〃「古代居館遺跡として注目される三ツ寺I遺跡」『東アジアの古代文化』36号 1983年7月
〃・女屋和志雄「古墳時代豪族の居館跡—三ツ寺I遺跡—」『月刊文化財』11月号 1983年11月
〈原之城遺跡〉
『原之城遺跡・下吉祥寺遺跡』伊勢崎市教育委員会 1982年3月
中沢貞治「原之城遺跡—六世紀の環濠居館址—」『群馬歴史散歩』第52号 1982年5月
〈その他〉
『本宿・郷土遺跡発掘調査報告書』富岡市教育委員会 1981年3月
『松野遺跡発掘調査概報』神戸市教育委員会 1983年3月
『山前遺跡』小牛田町教育委員会 1976年3月
『大阪府大園遺跡発掘調査概要・II』大阪府教育委員会 1975年3月
『鳴滝遺跡発掘調査概報』和歌山県教育委員会 1983年3月



遺構全景（北から）



張り出し部（南から）



張り出し部東側遺物出土状況（北から）



1号竪穴状遺構と11・15号住居跡（南から）